神話

川崎ゆきお

「神話の中に出て来る神々は本当にいたとは誰も思わないのですが、あれは何ですか」

「神話でもリアルでも、神なんて現実には出てこないでしょ」

「えっ」

「だから、町を歩いていると神がウロウロしているとか、町内を散歩しているとかはないでしょ。だから昔もそんな風景はなかった」

「猫は歩いていますねえ。野良犬はすっかりいなくなったけど」

「今、いないからと言って、昔もいなかったとは言い切れんが、神がいた時代は神話時代だ。しかし歴史上、そんな年代はないしね」

「じゃ、やはり今も昔も神はいなかったと」

「神話に出て来るような神様はね」

「えっ、じゃ、神話に出てこない神様ならいると」

「神かどうかは分からんが、見えない、姿がない、名もない。そんなもの存在しているとは思えんが」

「じゃ、神話に出てくる神々は何だったのでしょう」

「人じゃないかな」

「ほう」

「有力者だよ」

「はい」

「だから、当時の豪族などに当てはめて考えると、見えてくるかもしれん」

「豪族ですか」

「その地方を支配していた人だ」

「それは聞いたことがあります」

「神話というのは、そういうのを整理したんだろうねえ」

「はい」

「勝った側と負けた側、征服した側と征服された側。それを勝った側がいいように書いたのが、神話かもしれん」

「それも聞いたことがあります」

「そうか、じゃ、特に言うほどのことじゃないか」

「でも、何故神話になっていないような事柄もあるのでしょ」

「そうそう、肝心要のところは、神話にはしないし、触れない。その片鱗さえ残さない」

「それは何でしょう」

「弱点かもしれんねえ。そこを突かれるとまずいとか。例えば最大の大枠とかだ」

「はい」

「しかし、私達は神話でも歴史でも、そういうものでしか過去のことは分からない。ただ、埋蔵物は別だがね」

「古墳とか、土器とか」

「考古学が示す事実、これが大事かもしれん。何かの片鱗だろうからね。ただ、古文書や歴史書に記されていることなら、当てはめやすいが、それらにも書かれていないとなると、何処に話を繋げればいいのかが分からない。何に使われた道具なのかも分からなかったりする。呪器だったりもするしね。あとで、ただの食べ物入れだったり、楽器だったり。ただのアクセサリーや置物だったと分かったりするが」

「神話の話なんですが」

「ああ、神話ねえ」

「書かれていない神話とはどんな話でしょうか」

「繋ぎ目だろうねえ。話が急に飛び、いきなり現れる神なんかが怪しい。繋ぎ目がない」

「本当の歴史的事実は、その中に隠されていると思うのですが」

「いやいや神話は神話。まともに取り上げると、矛盾するばかり。一人二役なんて、ざらだよ」

「色々な憶測や仮設がありますねえ」

「君も古代史の謎に興味があるのかね。それを古代史ロマン趣味という。特に定説崩しが一番いい」

「はい」

「聖徳太子はいなかった。大化の改新はなかった」

「ああ、いいですねえ」

「しかし、そういうものが証明されても、何も変わらん」

「はあ」

「もう時効だ」

「徳川家康が、大坂の陣で幸村に首を取られて、そのあとは実は影武者だったとかも？」

「それも時効だ」

「時効」

「もう、効果はない」

「はい」

「都合のいい話を神話と言う」

「あり得ない技を神業と言いますねえ」

「だから、ありえないのだろうよ」

「あ、はい」

了